

釜石のラグビーを考える*

—「新日鐵釜石」から「釜石シーウェイブス RFC」へ—

宮 島 良 明

概 要

かつて、日本選手権7連覇の栄光に輝いた新日鐵釜石ラグビー部は、2001年4月、地域密着型をめざしたクラブチーム「釜石シーウェイブス RFC」として生まれ変わった。クラブ運営上の課題を抱えつつも、「行政」「地元企業」「市民」によるサポートの小さな「芽」は萌え、その環が少しずつ広がりつつある。

釜石にとって、今も昔も「ラグビー」は地域の「希望」であることに違いはないようだ。「新日鐵釜石」時代には、ある種の「あこがれ」や「誇り」が「希望」の源泉であったが、クラブ化後も、釜石シーウェイブス RFC が、より現実的な「実感」に基づいた「希望」を地域にもたらすようになったからである。

キーワード

新日鐵釜石、つなぐラグビー、地域密着型クラブチーム、サポートの環、変化する「希望」

はじめに

ラグビーとは、一チーム15名ずつで行う球技である。「ボールの争奪 (contesting possession)」と「プレーの継続 (maintaining continuity of play)」という2つの基本原則が存在し、前者は、「キックによる開始と再開、スクラム、ラインアウト、ラック、モール、そしてタックル」により、後者は、「ボールをパスしたり、持って走ったり、キック

* 本稿は、東京大学社会科学研究所の全所的プロジェクト「希望学」(2005年度～)が、「地域の希望」をテーマに2006年度より実施している「釜石調査」の研究成果の一部である。「釜石調査」においては、インタビューに応じてくださった方々を始め、釜石シーウェイブス RFC や釜石市の関係者の皆さまから大変なご協力を賜った。ここに特記して、感謝の意を表したい。

また、本稿の掲載に際しては、2名の査読者による審査を受け、大変貴重なコメントをいただいた。心より感謝を申し上げたい。

したりすることや、ラックおよびモールを形成」したりすることにより行われる¹⁾。特に、前者「ボールの争奪」にはラグビー特有の激しいコンタクトプレーをとる。この激しい「あたり」²⁾と、屈強な男達が泥だらけになりながら、ひたむきに楕円のボールを追う姿が、ラグビーを「スポ根」のイメージへと導く。伏見工業高校ラグビー部（山口良治監督）をモデルにした「スクール・ウォーズ」は、「スポ根」テレビドラマの代表格として有名である³⁾、また、大学ラグビーの名門チームのキャッチフレーズも、「荒ぶる魂（早稲田大学）」「魂のタックル（慶応大学）」「重戦車・前へ（明治大学）」とものものしい。

そんなラグビーとともに栄枯盛衰を経験した地域がある。岩手県釜石市である。北東北は三陸海岸に位置する釜石は、言わずと知れた「ラグビーの街」である。「釜石」と「ラグビー」を強固に結びつけたものはいったい何か、そのような疑問に端を発し、地域とスポーツ、より具体的には「釜石」と「ラグビー」の関係について考えてみようというのが、本稿の目的である。

なぜ、釜石のラグビーが有名になり、多くの人気を得たのか、また、なぜ、そもそもそれがラグビーだったのかについては、1. で検討を行う。2. では、企業チーム「新日鐵釜石」から2001年に新しく地元密着型のクラブチームとして生まれ変わり、活動を開始している「釜石シーウェイブス RFC」の成り立ちや運営状況、また、国の政策である「総合型地域スポーツクラブ」との関係について明らかにする。続く3. では、その「釜石シーウェイブス RFC」に対する釜石市のサポートや、地元企業、市民の新しい応援の動きなどを中心に紹介し、地域における「希望」の「芽」が、ほのかに萌える姿を確認する。最後に、これらを踏まえ、「新日鐵釜石」と「釜石シーウェイブス RFC」の「違い」について若干の考察を行うこととしたい。

1. なぜ、釜石でラグビーか？

(1) 「北の鉄人」の軌跡

新日鐵釜石製鐵所ラグビー部（以下、「新日鐵釜石」）は、1959年の「同好会」の結成か

1) 財団法人 日本ラグビーフットボール協会[2006]4頁。

2) 「あたり」とは、コンタクトプレーのことを指す。

3) 「スクール・ウォーズ」はテレビドラマだけではなく、小説（馬場信浩『スクール・ウォーズ—落ちこぼれ軍団の奇跡』光文社文庫、1985年。）や、NHKのドキュメント番組（『プロジェクト X 挑戦者たち ツッパリ生徒と泣き虫先生～伏見工業ラグビー部・日本一への挑戦～』）としても有名である。

らその活動をスタートさせた（図表1参照）。翌1960年には会社から予算の支出がある「専門部」に、また、翌々年の1961年には選手補強のための大卒本社採用枠が設けられる「重点部門」に昇格した⁴⁾。かつて、「新日鐵釜石」の活躍は、「釜石」の名を全国区とした。1979年から1985年にかけてラグビー日本選手権を7連覇し、「北の鉄人」として無敵の強さを誇った。松尾雄治（スタンドオフ）や森重隆（センター）など、数多くの名プレイヤーを輩出したことでも知られている。

1985年以降は低迷が続いた。1993年シーズンからは、7年連続で下位リーグへの陥落をかけて、入れ替え戦に挑み、何とか踏み留まっていた、いわゆる「裏V7」の時代であった⁵⁾。しかし、「裏」でもV8はならず、2000年シーズン、ついにそのときは来た。入れ替え戦に敗れ、下位リーグへの降格が決まったのだ。それは、皮肉にも「新日鐵釜石」から「釜石シーウェイブス RFC」への移行が決まったシーズンでもあった。

図表1 釜石ラグビー略年表

1959年	富士製鐵釜石製鐵所にラグビー「同好会」が発足。
1960年	ラグビー「部」（「専門部」）に昇格。
1961年	ラグビー部、「重点部門」に昇格。
1965年	岐阜国体優勝。
1970年	富士製鐵と八幡製鐵が合併し、「新日本製鐵」となる。
1971年	社会人大会初優勝。
1974年	CTB 森重隆、入部。
1976年	SO 松尾雄治、入部。
1977年	日本選手権、初優勝。
1979年	日本選手権、優勝、V1。
1985年	V7達成。第二高炉休止。
1989年	第一高炉休止。
2000年	新日本製鐵、社内運動部の単独運営をやめる方針を打ち出す。
2001年	釜石シーウェイブス RFC 発足。

（出所）朝日新聞社事業部メセナススポーツ部[2005]、岩手日報ホームページ、NHKプロジェクトX制作班編[2004]、大友[2007]、釜石市ホームページ、永田[2002]、読売新聞盛岡支局編[2007]より、筆者作成。

（2）釜石ラグビーの特徴

「新日鐵釜石」について、地元釜石ではどのようにとらえられているのであろうか。釜石市のホームページでは、以下のような紹介がなされている。

「…東北を中心とする高校出身者を基礎から鍛え上げ、『スクラムを押し、破壊力のある、相手に走り勝てるFW』をつくり上げました。…」

4) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 274-5 頁、読売新聞盛岡支局[2007] 39-42 頁。

5) 読売新聞盛岡支局[2007] 141 頁。

V7当時のメンバーは、CTB 森、SO 松尾といったゲームメーカーの存在もありますが、ただひとりとして大学出身の FW はおらず、BK を含め、そのほとんどは高校時代は無名の選手たちでした。これらの偉業の陰には、東北人特有の忍耐強さと、地域、会社をあげての温かい支援、そして、歴代監督のすばらしい指導力など、さまざまな要素がありました。⁶⁾

「新日鐵釜石」には、いくつかの際だった特徴があった。まず、第1点は、地元高卒選手を積極的に採用し、「鍛え上げる」ことで強いチームを作っていたということである。これは、地元からより多くの応援を得るためには、地元の選手を採用することが一番の近道であると考えられたからである⁷⁾。また、創部以来、高卒選手を主体とし、大卒選手はリーダー役として3年に2、3名程度採用するというチーム編成の方針もあった⁸⁾。2点目は、「アマチュアリズム」を徹底したことである。選手は、常に仕事とラグビーの両立が求められた⁹⁾。3点目は、練習を含め「先進的」なラグビーを展開したということである。「タッチフット」や「グリッド」、バーベルを用いた「筋力トレーニング」などの最先端の練習方法を早くから取り入れ、当時主流だったボールを持ったらとにかく前を突くという「突進型ラグビー」ではなく、「つなぐ（展開）ラグビー」を志向した¹⁰⁾。その結果として、V7を決めた1985年の神戸製鋼戦（社会人選手権決勝）において、フォワード、バックス13人が自陣ゴール前からボールをつなぎ、トライをあげるという伝説のプレー（「13人トライ」）が実現した¹¹⁾。

これらの特徴が、「新日鐵釜石」の人気を高めた。その人気は、釜石市内のみならず、岩手県、さらには東北地方、そして、全国へと広がった。それは、「東北の厳しい環境でも中央に勝つんだという気持ち」¹²⁾に共感する人が多かったからであろう。また、チームが全国大会で活躍すればするほど、「おらほのチーム」¹³⁾という意識は高まり、釜石市民、岩手県民の「自慢」「誇り」となっていった¹⁴⁾。大学の有名選手ではなく、地元の無名高卒選手を採用し、遅れた「スポ根」的な練習・戦術ではなく、イギリスから持ち込まれた「先進的」な練習・戦術を用い、「中央」を相手に勝ち進む「新日鐵釜石」は、「遅れた東

6) 釜石市ホームページの「歴史と伝統」内「ラグビー日本一」（http://www.city.kamaishi.iwate.jp/rekisi_dentou/rugby.htm、最終アクセス日2007年7月25日）より転載。

7) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 285 頁。

8) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 277頁、藤島[2003] 91 頁。

9) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 274頁、藤島[2003] 99-100 頁。

10) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 278-9 頁、日本経済新聞運動部編[2002] 285頁、藤島[2003] 94-5 頁。

11) NHK プロジェクト X 制作班[2004] 318頁、読売新聞盛岡支局[2007] 7-11 頁。

12) 読売新聞盛岡支局[2007] (161 頁)において、高橋善幸氏（現釜石シーウェイブス RFC・チームディレクター、元新日鐵釜石・監督、主将）の言葉として紹介されている。

13) 「私たちのチーム」ということを指す。

14) 読売新聞盛岡支局[2007] (100-2 頁)では、全国の東北出身者の「熱狂」ぶりが紹介されている。

北」¹⁵⁾ のイメージを打破し、地域の「独自性」を再認識させた¹⁶⁾。

2. 釜石シーウェイブス RFC の誕生

(1) 企業チームからクラブチームへ

1985年にV7を達成した後、再び栄冠を勝ち取ることがなかった「新日鐵釜石」に2000年11月、転機が訪れた。新日鐵本社が、社内運動部のチーム名から「新日鐵」の社名を外す方針を発表したのである¹⁷⁾。つまり、新日鐵は運動部の単独運営をやめ、地元企業や地元自治体などとの共同運営を目指し、チームの広域クラブ化に着手したのである¹⁸⁾。「企業の業績悪化に伴って廃部や休部に追い込まれるチームが相次ぐなかで、景気に左右されずにスポーツ活動を支援し、存続させることが目的」とされた¹⁹⁾。堺のバレーボール部は、新日鐵100%出資の子会社にし、独立させたが、それは、バレーボールというスポーツ特性と大阪に隣接した大都会という事情を踏まえてのものであった²⁰⁾。国峰淳部長（当時）によれば、釜石の場合は、「人口5万人足らずの地方都市、加えて、ラグビー部員が多い。チームを堺のように株式会社化しても、とても採算がとれない。それよりも、釜石はV7時代から町ぐるみのチーム、地域密着型のチームカラーを持っていた。釜石はクラブチーム化がベストの選択」であった²¹⁾。また、高橋善幸監督（当時）は、「企業チームとしての孤立感があり、いずれはこういう方向に進むものと考えていた。だれもが参加することで、チームの発展も期待できる。今後は選手自身も意識を変え、地域のみなさんと一緒にやっていきたい」と、クラブ化をポジティブにとらえた。

このようななかで、このクラブ化が、将来的な「廃部」へのファースト・ステップではないかとの懸念もあったが、国峰部長は「スポーツを通じた企業と地域の共生化を目指す

15) 河西[2001] (viii) において、「考古学上の新発見や、国境や民族を超えた視点」により、近年の「東北史研究は『後進』『辺境』イメージを実証的に払拭」しつつあるが、「一般的にまだ“遅れた東北”という見方が残っていることは否定」できない、との指摘がなされている。

16) 古厩[1997] (14頁) では、東北について「固有の歴史と文化体系を有する、別世界をもった地域」であり、「近代日本においてもこうした別世界性は消え去ってしまわず、中央との表裏一体性は北陸ほど強くなかった」ことが指摘されている。

17) 『岩手東海新聞』2000年11月28日、左近允[2002] 49-50頁。対象となったのは、釜石製鐵所のラグビー部のほか、八幡、広畑、名古屋、君津の硬式野球部、堺のバレーボール部、広畑の柔道部の全7部。

18) 『岩手東海新聞』2000年11月28日。

19) 同上。たとえば、バレーボールの有名実業団チーム、日立が廃部になったのは2001年、ユニチカは2000年であった（日本経済新聞運動部編[2002] 270-278頁参照）。

20) 左近允[2002] 50頁。

21) 左近允[2002] 50-51頁。

が、活動運営費などの資金面はこれまで通り釜石製鉄所が中心になって支えていく」とし、また、「社会人ラグビーでも廃部が相次いでいる事態を看過できず、一石を投じたいと思った。釜石ラグビー部には、他のチームにはない存在感がある。廃部へのステップではないし、廃部はあり得ない」と、これを否定した²²⁾。

「新日鐵釜石」は、新たに地域密着型クラブチームとして、再出発することとなった。新しいチーム名は、「新日鐵」の冠を外すことを条件に公募され、「釜石シーウェイブス RFC」に決まった²³⁾。全国から 823 通の応募があり、そのうち半数以上の 413 通にはチーム名に「釜石」が含まれていた²⁴⁾。釜石シーウェイブス RFC 準備委員会による「チーム名称の由来」は以下のとおり。

「釜石シーウェイブス RFC は、東北の地、『釜石』から新たなラグビースタイルを発信し地域の人々から愛され親しまれる事を願ってつけられた。

また、シーウェイブスとは、『力強く押し寄せる海の波』を意味する。

三陸の海の雄大さと爽やかさを表現し、グラウンドでは怒濤のようにスピーディー且つ攻撃的に突き進みフェアでより魅力的なラグビーを展開することにより、多くの勝利・感動をファンと共に分かち合うという意図がある。」²⁵⁾

企業チームからクラブチームへの移行に際しては、クリアしなければならない決定的に重要で、非常に困難な問題が存在していた。それは、「新日鐵釜石」がそれまで参加していた「東日本社会人リーグ」²⁶⁾への参加が、日本ラグビー協会の規約により単一企業チームに限られていたことである²⁷⁾。つまり、新生のクラブチーム、釜石シーウェイブス RFC は、日本選手権（日本一を決める大会）へとつながるリーグ戦への参加ができないということであった。このことを聞いた釜石市民私設応援団（佐野隆夫代表、釜石市内でスポーツ店を経営）は、新生クラブチームが今までどおり、リーグ戦に参加できるよう、日本ラグビー協会に働きかけるため、JR 釜石駅前などで署名活動を開始した²⁸⁾。署名活動は、職場や地域などで急速な広がりを見せ、1 ヶ月に満たない間に 1 万 4816 人分の署名が集まるという形で結実した²⁹⁾。署名は、決して「動員型」で行われたものではない。仲間同士、署

22) 『岩手東海新聞』2000 年 11 月 28 日。

23) 『岩手東海新聞』2001 年 4 月 10 日。

24) 同上。

25) 釜石シーウェイブス RFC 準備委員会「クラブチーム設立総会」（2001 年 4 月 25 日）資料より転載。

26) 国内トップレベルのリーグ（2000 年当時）。

27) 『岩手東海新聞』2000 年 12 月 6 日。

28) 同上。

29) 読売新聞盛岡支局[2007] 145-8 頁。

名用紙をコピーしたり、ファックスしたりしながら知人、友人のつてをたよりに広がっていった³⁰⁾。人口が5万に満たない釜石市において、この短い期間に、これだけの数の署名が集まったということは、奇跡的なことであり、その後のクラブ運営に大きな期待を持たせた³¹⁾。この署名を受け、日本ラグビー協会は、2000年12月24日、新生釜石シーウェイブス RFC のリーグ戦への参加を認める決定を下した³²⁾。市民とサポーターの思いが通じ、協会を規約改正へと動かしたのであった。

(2) クラブの発足と「総合型地域スポーツクラブ」

2001年4月25日、「新日鐵釜石」は「釜石シーウェイブス RFC」として新たなスタートを切った。釜石シーウェイブス RFC の「設立趣旨」は以下のとおり。

「(1) 将来のスポーツ振興の指針となり得る先駆的な挑戦

- 1) 岩手県（さらには全国）におけるラグビーの普及と振興に寄与し、ひいては県民の健康増進に寄与
 - 2) 子供から大人まで広くラグビーを愛する人々に対し、地域における活動の場とラグビーを通じたボランティアの場を提供
 - 3) 幼少からの（一貫）指導を通じ競技力向上に寄与
- (2) これを支える上で、活躍の場を求めるラグーが集い、強く・愛される全国トップチームを編成
- (3) 将来的にはラグビーを中核としたスポーツタウン（生涯スポーツとラグビーのメッカの両立）をつくり、市・県の活力向上と地域振興に寄与」³³⁾

かつての「新日鐵釜石」のように「強く・愛される全国トップチーム」を、企業ではなく、地域でつくり、「ラグビーを中核としたスポーツタウン」が、地域の「活力向上と地域振興」に貢献する、まさにこれは全国に先駆けた「挑戦」であった。

このような釜石シーウェイブス RFC の「理念」は、国が推し進める「総合型地域スポーツクラブ」の「方針」ともマッチし、2002年度と2003年度には国のモデル事業にも指定された³⁴⁾。「総合型地域スポーツクラブ」とは何か、まず、その特徴からみておこう。以下は、文部省（当時）の資料からである。

30) 同上。

31) 署名は、北上市など釜石市の外からも寄せられた（読売新聞盛岡支局[2007]146頁）。

32) 読売新聞盛岡支局[2007]146頁。

33) 釜石シーウェイブス RFC 準備委員会「クラブチーム設立総会」（2001年4月25日）資料より転載。

34) 詳しくは、左近允[2002]を参照。

「総合型地域スポーツクラブとは、主にヨーロッパ諸国などに見られる地域のスポーツクラブの形態で、子どもから高齢者、障害者まで様々なスポーツを愛好する人々が参加できる総合的なスポーツクラブのことである。総合型地域スポーツクラブは以下のような特徴を有している。

- 1) 単一のスポーツ種目だけでなく、複数の種目を行っている。
- 2) 青少年から高齢者、初心者からトップアスリートまで様々な年齢、技術・技能の保有者が活動している。
- 3) 活動の拠点となるスポーツ施設、クラブハウスを有しており、定期的、計画的にスポーツ活動の実施が可能となっている。
- 4) 質の高いスポーツ指導者を配置し、個々のスポーツニーズに対応した適切な指導が行われる。

ヨーロッパ諸国においては、スポーツが生活の中に根付いており地域住民の多くがその土地の総合型地域スポーツクラブに加入している。総合型スポーツクラブは、地域住民にとって不可欠なものとなっている。³⁵⁾

文部省（当時）は「総合型地域スポーツクラブ」の特徴を、多種目、多世代、多志向（それぞれ上の1), 2), 3) に対応）とし、地域の「社交場」のようなヨーロッパのスポーツクラブをイメージしているようである。なぜ、日本において、このようなヨーロッパ型スポーツクラブが構想されるようになったのであろうか。黒須[2006]よれば、①長引く不況の影響を受け、企業スポーツの休部、廃部が急増したこと、②少子化にともなう部員数の減少により、学校運動部の活動が停滞したこと、③地域のスポーツクラブのメンバーが高齢化している（世代交代が進まない）こと、④財源不足により、行政は多様化する住民ニーズに答えられなくなっていること、があげられる³⁶⁾。

ただ、どうしてもこの「総合型地域スポーツクラブ」構想に関しては、筆者自身、違和感をぬぐいさることができない。まず、第1の違和感は、文部省が構想するこの手の地域密着型のスポーツクラブは、本来、ボトムアップ型の組織、運営でなければならいのではないか。しかし、現実には、「文部科学省は2004年からこれを日本体育協会に委託し、そこから地方（都道府県）体育協会を通じその創設を市町村に鼓舞している。」³⁷⁾

第2の違和感は、スポーツの本来の意味を巡ってのものである。「スポーツ」という語は日本語には訳されず使われている。それは、なぜか。「イギリスの支配階級で余暇が生まれてきた歴史」を背景に、「もともと『スポーツ』(SPORTS)という英語が余暇の利用を意味していた」からであり、「英語のスポーツという言葉であらわされる、ゲーム成立過程で内面化されたさまざまな意味合い（コンテクション）をもった適切な言葉が無い土

35) 文部省「我が国の文教施策—心と体の健康とスポーツ（平成10年度）」より。

36) 黒須[2006]19頁。

37) 中島[2006]8頁。

地に、それに相当する現象が生じた」からである³⁸⁾。このような言葉の背景からも、ヨーロッパ的なスポーツクラブは日本にはなじまないと思われるが、それでもヨーロッパ型を志向するべきなのだろうか。

第3の違和感は、「多志向」の名のもと、本来全く性質の異なる「生涯スポーツ」「競技スポーツ」「学校体育」を同じ枠組みのなかで考えてもよいのだろうか、また、その必要があるのだろうか、ということである。釜石シーウェイブス RFC の場合は、特にトップチームの活動を重視する形のクラブであるので、この点は、非常に重要なポイントとなる。

(3) クラブ運営上の課題

企業チームからクラブチームへと移行を果たした以上、クラブチームの選手は必ずしも新日鐵釜石製鉄所に所属している必要はない。2001年4月22日には、初めての選手セレクションが行われ、1名が入部した³⁹⁾。2006年11月現在では、新日鐵に所属している選手は、半数(34名中17名)に過ぎない⁴⁰⁾。新日鐵以外の所属先は、さまざまであり、たとえば幼稚園勤務や、コンビニのアルバイトなどである⁴¹⁾。クラブチームになったとはいえ、ここには、「昼間はきっちりと仕事をし、練習は夜に行く」という「新日鐵釜石」時代の伝統が残されている。ただ、所属先や待遇の違いにより、練習や試合に臨むときのモチベーションに差が生じる場合もあり、クラブ化による選手獲得機会の増加は、チーム強化への期待と裏腹に、チーム編成上の新たな問題をもたらす結果となった。

また、チーム運営費に関しても、それまでの新日鐵の丸抱えから、自立的なものへと移行を強いられた。図表2は、釜石シーウェイブス RFC の収支の状況を年度別に示したものである。2001年の発足当時、5000万円程度だった「支出」は、年々増え2006年度には1.5倍の7600万円が予算として計上されている。チーム活動費ではなく、事務局費や、サポーター関連支出の増加が目立つ。

一方、「収入」の方とはいうと、サポーター会費の低迷が目につく。サポーター会費のなかでも法人会費は、スポンサー料とあわせて比較的安定して推移しているものの、個人会費は伸び悩んでいる。法人会費、スポンサー料の背後には、もちろん新日鐵の支援があるものと考えられるが、個人会費は、サポーター一人一人の「支援」「応援」のたまもの

38) 多木[1995]8頁。

39) 『岩手東海新聞』2001年4月10日、および、筆者の聞き取り調査による。

40) 釜石シーウェイブス RFC ホームページ、および、筆者の聞き取り調査による。

41) 2005年には、初めてのプロ契約の選手も出現した(釜石シーウェイブス RFC ホームページ、および筆者の聞き取り調査による)。

図表 2 釜石シーウェイブス RFC の収支決算

収入

項目	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度(予算)
前年度繰越金		17,256,473	25,428,319	22,424,367	25,669,552	23,272,757
(1)会費会費	740,000	1,145,000	1,189,000	1,159,000	928,000	1,000,000
(2)サポーター会費	63,738,000	47,426,852	20,932,790	20,419,000	19,100,000	24,000,000
個人	12,688,000	10,615,000	12,163,000	11,289,000	9,940,000	11,000,000
法人	51,050,000	36,811,852	8,769,790	9,130,000	9,160,000	13,000,000
(3)スポンサー料	-	-	22,550,000	30,550,000	26,550,000	30,000,000
(4)信販会社還元金	-	816,000	-	-	-	-
(5)協会補助金	1,801,580	3,984,750	13,062,040	3,405,000	3,724,000	3,000,000
(6)その他	783,319	1,054,173	5,264,781	5,514,228	3,400,130	3,500,000
小計	67,062,899	54,426,775	62,998,611	61,047,228	53,702,130	61,500,000
合 計	67,062,899	71,683,248	88,426,930	83,471,595	79,371,682	84,772,757

支出

項目	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度(予算)
(1)チーム活動費	39,157,183	36,159,317	52,449,531	45,252,334	35,900,228	38,000,000
・大会遠征、強化費	20,582,610	18,928,443	38,793,970	23,845,105	14,724,936	16,000,000
・用具費等	6,423,926	4,372,134	4,832,137	6,009,961	6,935,994	7,000,000
・治療費、交通・輸送費等	6,314,579	4,970,976	4,081,850	7,895,223	5,044,376	5,000,000
・外国人の旅費等	4,926,293	4,320,639	1,552,371	3,983,403	7,167,972	8,000,000
・その他	909,775	3,567,125	3,189,203	3,518,642	2,026,950	2,000,000
(2)事務局費	5,027,115	8,016,453	11,538,025	10,475,237	14,472,969	18,000,000
・機関誌発行等	1,202,238	895,121	822,095	552,326	1,274,850	1,300,000
・郵便通信費	1,411,211	2,318,916	2,324,984	1,831,347	1,894,780	1,800,000
・事務謝礼費	590,600	1,029,120	1,110,250	2,455,375	3,312,406	7,900,000
・旅費交通費	777,558	1,517,526	2,886,980	2,048,082	2,171,733	2,000,000
・事務用品他	826,396	624,140	1,979,182	678,165	1,030,768	1,000,000
・その他	219,112	1,631,630	2,414,534	2,909,942	4,788,432	4,000,000
(3)サポーター募集、応援費	2,742,116	1,716,176	2,005,007	1,823,010	5,201,335	5,000,000
(4)普及・振興費	-	362,983	10,000	251,462	524,393	500,000
(5)試合積立金へ	-	-	-	-	15,000,000	15,000,000
(6)事務局開設費	2,880,012	-	-	-	-	-
(7)その他	-	0	0	0	0	0
小計	49,806,426	46,254,929	66,002,563	57,802,043	71,098,925	76,500,000
繰越金	-	25,428,319	22,424,367	25,669,552	8,272,757	8,272,757
合 計	49,806,426	71,683,248	88,426,930	83,471,595	79,371,682	84,772,757

(出所) 釜石シーウェイブス RFC の各年度定期総会資料より作成。

である。

そのサポーター登録数の推移を示したものが、図表 3 である。法人会員数は、法人会費やスポンサー料と同様に安定的に推移しているものの（200（2001年度）→199（2005年度））、個人会員数は、2005年度までに 800 人以上も減少した⁴²⁾。特に注目すべきは、釜石市内の数が減少しているということである。3 年度分のデータしかないが、減少傾向は否めない。2000 年末に、日本ラグビー協会に規約改正の申し入れをした際、1 万 4000 人以上の署名が集まったことを考えれば、潜在的なサポーターは、釜石市市内にもまだまだ存在するはずである。岩手県内、県外を含め、会員の獲得が釜石シーウェイブス RFC にとって、もっ

42) 個人会員には、ゴールド会員（会費 1 口 2000 円）とクリスタル会員（2 口 4000 円以上）、ファミリー会員（1 万円）の 3 種類があり、試合観戦用のチケットなど、会員特典が異なる。

図表 3 釜石シーウェイブス RFC のサポーター登録数の推移

種類別一覧

	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
個人会員	3291	2815	3046	2897	2460
ゴールド	1753	1320	1360	1284	1023
クリスタル	1538	1495	1609	1508	1328
ファミリー			77	105	109
法人(団体)会員	200	208	190	195	199
合 計	3491	3023	3236	3092	2659

地域別一覧

	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
個人会員	3291	2815	3046	2897	2460
釜石市内			823	793	664
岩手県内			954	948	887
県外			1269	1156	909
法人会員	200	208	190	195	199
釜石市内			133	134	134
岩手県内			24	24	26
県外			33	37	39
合 計	3491	3023	3236	3092	2659

(出所) 釜石シーウェイブス RFC の各年度定期総会資料より作成。

とも重要な課題である。

3. 釜石シーウェイブス RFC へのサポート

(1) 釜石市のサポート

サポーター登録数こそ伸び悩んでいるものの、行政、地元企業、市民からのサポートの輪は、着実に広がりつつある。

まず、「市」の場合から見ていこう。2000年のクラブ化決定時、「新日鐵釜石」から支援を要請された釜石市であったが⁴³⁾、その後、さまざまな形でサポートを行っている。釜石シーウェイブス RFC に関連する具体的な施策としては、①出前教室（普及活動）、②ラグビー合宿誘致（交流事業）③観光の3つをあげることができる。

①出前教室は、シーウェイブスの選手が市内の小中学校を訪ねて、直接タグラグビー指導をするというものである。この事業は好評を博し、2005年度には62講座、のべ参加人数1656人を数えた⁴⁴⁾。

43) 『岩手東海新聞』2000年12月6日。

44) 釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課「資料 釜石市の体育・スポーツ 平成18年度版」15頁。

②ラグビー合宿の誘致は、「交流・連携ネットワークの構築」の一環として、釜石市の『スクラムかまいし 21 プラン 後期基本計画』において打ち出されている⁴⁵⁾。過去に高校生チーム 3~4 校が実際に合宿を実施したが、宿泊施設とグラウンドの不足の問題に直面した⁴⁶⁾。釜石はもともと観光地ではないため、宿泊施設は少なく、また、グラウンドも松倉と上中島の 2 ヶ所に 2 面しかない。たとえば、1 シーズンにラグビーだけでも 800 チーム以上が夏合宿を行う菅平（長野県）には、グラウンドが 93 面ある⁴⁷⁾。合宿では、練習試合を多カード多ゲームこなすのが一般的であり、より多くのチームが同期間に合宿を行える場所が、合宿地としては好まれる傾向にある。

③観光資源として、釜石シーウェイブス RFC を活用しようという施策であるが、今のところうまく機能していない⁴⁸⁾。前項でも述べたが、釜石には、ラグビーグラウンドが 2 面しかない。ましてや、観戦席を備えた本格的なスタジアムがないのである。これでは、公式戦を行うこともままならず、シーウェイブス目当ての観戦客や観光客を釜石に集めることはできない。ただ、工夫のしようが全くないわけではない。2006 年シーズン初めての「有料」公式戦を松倉グラウンドで行い、約 2000 人が観戦に訪れた⁴⁹⁾。松倉グラウンドには、どこからでも入れる（正式な出入り口がない）ため、チケット代わりに「風船」を配り、代金支払いの「証拠」としたのである⁵⁰⁾。

このほか、釜石市のラグビーに対する具体的な予算措置（2006 年度）は、「ラグビィグドリーム」⁵¹⁾ へ 180 万円、「ラグビー普及支援事業」⁵²⁾ に 60 万と限られたものである⁵³⁾。しかし、厳しい財政状況のなか、市のスポーツ振興のための補助金（計 880 万円）のうち、1/4 以上がラグビーに割り当てられているのも事実なのである⁵⁴⁾。

45) 釜石市総務企画部総合政策課『第五次釜石市総合計画 スクラムかまいし 21 プラン 後期基本計画』2006 年 3 月、37 頁。

46) 筆者の聞き取り調査より。

47) 上田市（旧真田町）のホームページより。

48) 筆者の聞き取り調査より。

49) 同上。

50) 同上。

51) 年に 1 回行われるラグビーのイベント（釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課「資料 釜石市の体育・スポーツ 平成 18 年度版」20-21 頁）。

52) 事業の中心となるのは、釜石シーウェイブス RFC 選手によるラグビーの出前授業（釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課「資料 釜石市の体育・スポーツ 平成 18 年度版」15 頁）。

53) 釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課「資料 釜石市の体育・スポーツ 平成 18 年度版」22 頁、および、筆者の聞き取り調査より。

54) 同上。

(2) 地元企業と市民による新しい応援の動き

地元企業や市民の間には、シーウェイブスを応援する新しい動きがでてきている。まず、地元企業の応援の動きであるが、一つは、「ペイントタクシー」である。中妻町の文化タクシーは、タクシーの車体両側にシーウェイブスのフルバック篠原洋介選手のキックシーンと、「サポート TAXI」という応援メッセージをペイントし、市内を走りながら PR 活動を行っている⁵⁵⁾。平松篤専務によれば、「地域でシーウェイブスを応援する企画が増えており、タクシーを使って何かできないかと考えた」結果であった⁵⁶⁾。

2つ目は、「バルーンジャージ」である。鈴子町の岩手銀行釜石支店のショーウィンドウにバルーンで作られたシーウェイブスのセカンド・ジャージが飾られ、PR 活動に一役かっている⁵⁷⁾。作成は、「小さな風」代表で、バルーンアーティストの福成菜穂子氏によるものである（写真1）。

写真1



(撮影) 宮島良明

さらに地元の酒造メーカー、株式会社浜千鳥は清酒「頑張れ！！釜石シーウェイブス RFC」を販売し、酒飯店、卸売店の協力も得ながら、売上金の一部を運営資金としてクラブに贈っている（写真2は2007年4月に一新された3代目ラベルの本醸造）⁵⁸⁾。選手やクラ

55) 『岩手東海新聞』2007年1月24日。

56) 『岩手日報』2007年2月6日。

57) 『岩手東海新聞』2007年1月24日、『岩手日報』2007年2月6日。

58) 『岩手日報』2007年4月6日。

ブ関係者が、同社の田植えや稲刈りなど酒造り体験塾に参加していることから、この清酒は大槌町産の酒造好適米、吟ぎんがを使用した「ゆめほなみ」⁵⁹⁾と同規格のものとなっている⁶⁰⁾。

また、2007年1月には、新たに釜石市民による応援団が結成された⁶¹⁾。「最近は観戦する人が固定していたり、年齢層が高くなってきたことから、ファン層を広げて気軽に応援できる雰囲気をつくろう」というのが結成の目的である⁶²⁾。以下は、福成和幸団長の応援団結成時のメッセージ「シーウェイブス釜石応援団結成『檄文(げきぶん)』」からである。

「…地元の釜石に応援団はありませんでした。釜石シーウェイブスは釜石の誇りであり、かけがえのない宝であり、夢です。今こそ釜石応援団を結成し、多くの釜石市民の参加を得てシーウェイブスを支えていければと思います。」⁶³⁾

ここでは、地元企業や市民の間から出てきた、シーウェイブスを応援する新しい動きについてみてきた。小さな「芽」は出始めているように見える。「芽」が出てきているのであれば、それを育てよう、というのが未来志向、「希望」志向というもののなのであろう。

おわりに

本稿では、釜石のラグビー、特に釜石シーウェイブス RFC の事情を中心に検討を行ってきた。釜石にとって、「ラグビー」は今も昔も地域の「希望」であることに違いはない

写真 2



(撮影) 森田英嗣

59) 「ゆめほなみ」は同社が造る地産地消を目指したお酒のこと。

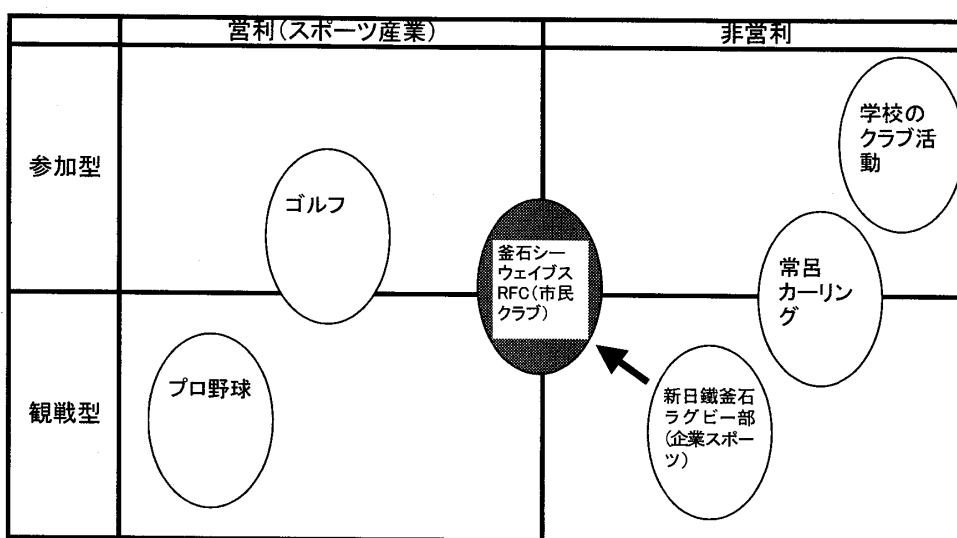
60) 『岩手日報』2007年4月6日。

61) 『岩手日報』2007年1月14日。

62) 同上。

63) 福成団長の「檄文」は、シーウェイブス釜石応援団メールマガジン【創刊号】(配信日2007年3月1日)で会員に配信された。このメールマガジンは、<http://merumaga.yahoo.co.jp/Detail/6254/p/1/>より閲覧可能(2007年10月25日現在)。

図表 4 スポーツの類型



(出所) 筆者作成。

ようだ。しかし、その役割や位置づけは大きく変わってきている。

図表4は、スポーツ(クラブ)の類型化を試みたものである。横軸で「営利」「非営利」を、縦軸で「参加型」か「観戦型」かを分けた。「新日鐵釜石」は、企業丸抱えのチームであったため「非営利」に分類され、そして、企業に所属する者以外は部の活動へ参加が不可能であったため、観戦以外に参加方法はなく、「観戦型」に分類される。釜石シーウェイブスRFCはというと、企業スポーツからクラブチームへ移行したことにより分類が矢印の方向へと動いた。運営上のことを考えれば、まったくの「非営利」とはいかず、「営利」の側面を持つし、また、逆に「営利」のみが目的となれば、クラブの理想から大きくずれることとなる。そして、トップチームの「観戦」のみを行うのではなく、老若男女が多種目、多志向のなかでクラブに「参加」できることが、少なくとも文部科学省が推奨する「総合型」であった。

つまり、「新日鐵釜石」時代には、スタンドで、またはテレビの前で応援すること以外に、チームに関わる方法はなく、選手も「雲の上」の存在であった。ある種の「あこがれ」や「誇り」が「希望」の源泉であった。また、新日鐵「の」チームであったため、「商売」などにも利用することはできなかった。

一方、クラブチームである釜石シーウェイブスRFCには、さまざまな関わり方がある。サポーター会員になる人、スタンドで応援する人、ボランティアで事務局の手伝いをする人、アルバイトをしながらシーウェイブスの選手を目指す人、シーウェイブスの関連製品を作る人等々、本当に多種多様な形で、「参加」の間口が開かれている。もちろん、心の中でそっと応援している人がいてもよい。「新日鐵釜石」時代とは異なり、釜石シーウェ

イブス RFC は、自身がより身近に感じ、自分にも「手が届く」という、より現実的な「実感」に基づいた「希望」を地域にもたらしめているのではないか。

2006 年度より、釜石シーウェイブス RFC の事務局長に就任した増田久士氏は、「シーウェイブスは釜石のキーコンテンツ」であると言った⁶⁴⁾。筆者も同感である。シーウェイブスは未だ、さまざまな可能性を秘めているからである。その意味では、釜石のラグビーは、まさに「これから」なのである。

参考文献・資料

<文献>

- 朝日新聞社事業本部メセナススポーツ部[2005]『朝日新聞で見る ラグビー日本選手権の歴史』朝日新聞社。
NHK プロジェクト X 制作班編[2004]『鉄の男たち 逆境からの日本—伝説の釜石ラグビー部—』『プロジェクト X 挑戦者たち10—夢遙か、決戦への秘策—』NHK ライブラリー。
多木浩二[1995]『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム—』ちくま新書。
大友信彦[2007]『釜石ラグビーの挑戦』水曜社。
河西英通[2001]『東北—つくられた異境』中公新書。
黒須充[2006]『総合型地域スポーツクラブを基盤とした地域振興のあり方』『月刊 自治フォーラム』Vol.559。
財団法人 日本ラグビーフットボール協会[2006]『平成 18 年度 競技規則』。
左近允輝一[2002]『『北の鉄人』釜石ラグビーの新たな挑戦—総合型地域スポーツクラブで再出発—』『朝日総研レポート』朝日新聞社総合研究センター、No.157。
中島信博[2006]『『地域スポーツ』の誕生』『月刊 自治フォーラム』Vol.559。
永田洋光[2002]『鉄人たちの雌伏—釜石ラグビーの新たな挑戦—』TBS ブリタニカ。
日本経済新聞運動部編[2002]『『松尾幻想』の呪縛—新日鉄釜石ラグビーの転生—』『敗因の研究 [決定版]』日経ビジネス人文庫。
馬場信浩[1985]『スクール・ウォーズ—落ちこぼれ軍団の奇跡—』光文社文庫。
藤島大[2003]『前衛思想としての新日鉄釜石—追憶の V7 再考—』『Sports Graphic Number ベスト・セレクション I』文春文庫 PLUS。
古厩忠夫[1997]『裏日本—近代日本を問い直す—』岩波新書。
森川貞夫[2006]『スポーツによる地域振興』『月刊 自治フォーラム』Vol.559。
読売新聞盛岡支局編[2007]『V7 の栄光よ再び 釜石ラグビー物語』熊谷印刷出版部。

<新聞>

- 『岩手東海新聞』。
『岩手日報』

<資料>

- 釜石シーウェイブス RFC 準備委員会「クラブチーム設立総会（2001 年 4 月 25 日）資料」。
釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課「資料 釜石市の体育・スポーツ 平成 18 年度版」。
釜石市総務企画部総合政策課『第五次釜石市総合計画 スクラムかまいし 21 プラン 後期基本計画』2006 年 3 月。
福成和幸「シーウェイブス釜石応援団結成『檄文（げきぶん）』』『シーウェイブス釜石応援団メールマガジン【創刊号】』（配信日 2007 年 3 月 1 日）2007 年 3 月。
文部省「我が国の文教施策一心と体の健康とスポーツ（平成 10 年度）」。

64) 2006 年 12 月 25 日に筆者が増田氏に行ったインタビュー調査より。

<ホームページ>

岩手日報ホームページ.

上田市（旧真田町）のホームページ.

釜石シーウェイブス RFC ホームページ.

釜石市ホームページ.